

事は理解した事にならない。而もその規準は仲々嚴格でありそれにあてはめる態度も強硬である。歴史事相に對するかゝる態度は歴史家にとつて最も重要な資格の一つだと思ふ。本書の文章がまことに讀み難いものであるにも拘らず最後まで人を引きづゝて行く力があるのは一つはかういふ點にあるのではないかと思ふ。

(A五版、昭和十六年十月三十日、弘文堂發行、定價參圓貳拾錢)
(内藤成申)

ギリシア史研究 第一

原 隨 園 著

本書はその再刊の序にも言はれてゐるやうに、昭和三年に一度出版されたものであるが、今回裝ひを新たにして再刻されるに至つたものである。十年前を知る人に向つては恐らく本書の價値なり内容なりを更めて紹介する必要はないであらう。併し本書が品切れとなり坊間でゐること殆ど不可能となつてから既に幾年かを經てゐる。新しい學徒にして本書に未だ接し得なかつた人々の夢からざるを思ひ、ここに再刊されるに當つて、簡単な紹介を試みる次第である。

本書は十一篇の雄篇からなつてをり、最初の五篇、即ち、一ギリシア史學の曙光、二、ヘロドトスの歴史、三、ツクユデデスの史學について、四、ポルユビオスの史風、五、時・運命：は希臘人の歴史意識の發展を叙述したものである。第一篇に於いて吾々

は、地方的傳説が次第に民族的普遍的傳説に綜合され、地方的神話が統一的體系的神話に構成されて行く姿の中に、歴史意識たる「事實を求める心と、發展の綜合的把握」への萌芽を知る。第二篇より第五篇に至る迄に希臘史學の代表者は無論、その他の散文作家や抒情詩人の言説・詩歌を通じて、歴史意識の發展と、その希臘的特質とが、流麗精緻に展開されてゐるのを見るであらう。

歴史意識に就いて深い反省が要請されてゐる今日、正に世界の古典ともいふべき希臘人の諸作品を通じて考究された、その史學思想は、又吾々に多くの示唆を與へるであらう。

本書の第六篇より第十一篇に至る六篇は、一括してギリシアに於ける國家論の探求といへるであらう。哲學の根源はギリシアに發するとは最早知識人の常識である。わけても希臘的思想の中心的課題が國家問題に集中されたことも、今は多くの人が認めつつある所である。希臘哲學は希臘的國家思想を無視しては、本質的に理解されることはないであらう。吾々は本書第六篇「ギリシアに於ける理想國家論の様式」、第七篇「ヘシオドスの『仕事』の一考察」、第八篇「アリストブハネスの喜劇『女の議會』について」、第九篇「理想國物語」、第十篇「リュクルオス傳説とその文化史的意義」、第十一篇「ソピヒストとその時代」に於いて、希臘人が如何に國家について「空想」したか、又現實社會を批判して、理想の國を或は「外國」に或は自己の「過去」に、又は現實の國家の「改革」に求めたかを知るであらう。常にポリス生活に基礎を置き、その政治性と離れ得なかつた希臘人にとつて、國家や法の問題は、特定

の個人に委ねられた問題でなくむしろ市民全體の問題であつた。それは客観化され學問化されるべき問題であると共に、日常性の問題であつた。だから詩の中に劇の中に、物語の中にも、それは顯現する。著者の鋭い眼は、所謂國家論と表題をもつもの以外にも、希臘人の國家思想を見逃さなかつた。吾々はここに深く日常性に根ざした希臘的國家思想、法思想を見出すであらう。又同時に所謂希臘哲學理解のためにも多くの背景をみるであらう。國家の問題が「理論」でなくして「生活」であるべき今日、本書に展開された希臘國家思想は、單に學問する者のみに興味を唆るのみならず、廣く一般人の教養を深める上にも一讀するべきであらう。

最後に、本書は再刊の辭にもあるやうに、著者の第二、第三のギリシア史研究と一聯の全體を構成すべきものの一である。既にその第二は上梓中ときく。出版される日も近いであらう。その時は又改めて本誌をかりて紹介の筆を執るであらう。(創元社發行、菊版四六二頁、定價五圓)(井上智勇)

世界史への斷想

原 隨 園 著

本書に收むる處のものは、史學理論「歴史」を初として、二十七篇の論文隨想である。

而して著者は、其「序に代つて」の中に於て、「歴史に徹するといふことは、唯過去の事象を記憶することではない。過去の成敗の

跡を鑑みることである。」而して吾々にとつては、「先づ第一に、悠久三千年に亙る歴史を我々の實踐の地盤とすることである。國史を學ぶ所以は、實に茲に眼目がある」のであるが、然し、「國史が我々の實踐の地盤であるやうに、世界の諸民族は、それぞれの歴史を地盤として有つてゐる。」従つて、「萬國の古今を通觀するところに、自ら博大なる視野が開かれる筈である」。而も「廣き世界的識見を持つとは、將來の日本人悉くに期待されねばならぬところである」。更に「歴史を學ぶのは斷じて、過去の事業を記憶することではない。自己の實踐の地盤とし、自己の血となし、肉となすために學ぶのである」と述べて居られるが、又以て、著者が本書に於て、如何なる課題を撰び、且何を訴へ教へられんとするかを窺ひ得るであらう。

著者は又、其「論「外交」の中に於て、「古典古代を彼等歐洲人が交通の財産として有つてゐる。我々は、それ故に、歐洲外交の性格を掴むためには、古典古代にまで遡る必要がある」と說かれる。著者は謂ふ迄もなく、吾古代希臘史の權威ではあるが、然し日頃其指導を受けつゝある吾々は又、先生の廣く世界史全般に對して有せらるゝ該博にして而も深遠なる高見に對しても畏敬措く能はざる者であり、必ずしも問題解決の鍵の總てを古代希臘にのみ求められるものでない事は、茲に總説を要しない處であるが、而も尚、諸問題解答の根源を、古典希臘に求めらるゝ事如何に多きものあるか、首肯されるであらう。

照して「世界史への斷想」と謂ふ。著者が、今日旺に論議せられ